

からくり夢時計

— DREAM ∞ CLOCKS —

川口 雅幸

第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章
時 の 鍵 <small>かぎ</small>	潜 <small>せん</small> 入 <small>にゅう</small> 大 作 戦 ！	妙 <small>みょう</small> な 噂 <small>うわさ</small>	机 <small>つ</small> の 下 <small>した</small> の 謎 <small>なぞ</small>
167	115	63	5

第七章

夢
時
計

337

第六章

不ふ思し議ぎ
な
名
前

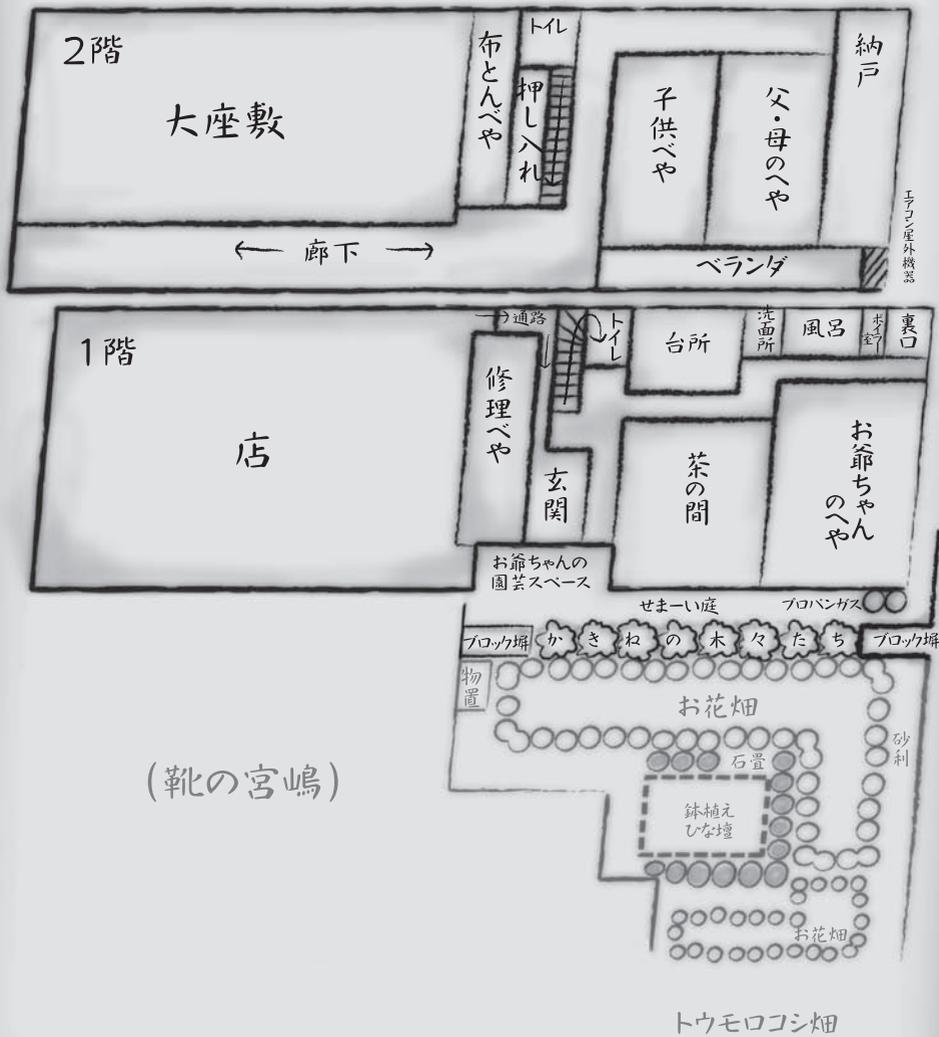
279

第五章

気
に
な
る
手
紙

213

時心堂 間取り図



(靴の宮嶋)

第一章

机の下の謎なぞ

夢。

オレの、ささやかな、夢。

それは、あいつらと一緒にサッカーをすること。本気のサッカーをすること。

冬の体育って好きだよ。ほぼ毎回、試合形式の授業だから。そういう意味では寒い季節が待ち遠しかったりもする。

でも、体育の時間とか休み時間とかだけじゃなくて、あいつらみたいに一年中、本格的に真剣に没頭してみたい。

別に、高校生になったら国立競技場に行きたいとか、プロになりたいとか、そんな大きな目標があるわけじゃない。

ただ、中学生になったらサッカー部に入って、スポ小で活躍してるあいつらと一緒に熱くプレーしたい——それだけ。

本当はもつとでかい、叶いそうにないくらいスケールだと格好いいんだろけどさ。
とにかく今は、思いっきりサッカーがしてみたいんだ。それが夢だ。

「だけど、このささやかな夢でさえも叶うかどうか分かんない環境に置かれてるんだから、参っちゃうよな。」

ましてや『将来の夢』なんて、考えるだけ無駄なんじゃないかって、そんな気がしてくるよ。

夢と現実。

うちには、いやでも現実を教えてくださいる大人が約二名もいる。

「もしもこの先、『将来の夢』ってのが見つかったとしても、お兄ちゃんには絶対に相談しないだろうな。」

こんなちつぽけな夢にもケチつけるんだもん、結果は最初から見えてる。

「お父さんに関しては、夢とか、そういう掴みどころがない話は、もうしないことにしてるし。だって、ブタの耳にシンジュツ……あれ、馬にネンジュツだったかな。何か違うな。まあ、いや。」

とにかく、現実ばつかりの大人にはもう、うんざりなんだ。

思えば、こんなふうに考えるようになったのって、あれがキツカケだったような気がする。

そう。何げない、あの一言が――

サンタクロースが本当はお父さんだった、ってことを知ったのは、もう二年も前のことだ。

毎年クリスマスには、プレゼントを二つももらえることになってる。

一つは夜ご飯の時。「誕生日おめでとう」って、お父さんから。

もう一つは、朝、目が覚めた時。サンタクロースが、クリスマスカードと一緒にひっそりと枕元に置いてってくれた。

夜、お父さんが手渡ししてくれる方のプレゼントは、決まってオレが望んでもない、『野口英世』とか『福沢諭吉』とかの、『日本の偉人シリーズ』という、ぶ厚い本だった。

口では嬉しそうに「ありがとう」って言って受け取ってたけど、毎年ながら結構がっかりするもんだ。

どうせなら、『お金の日本の偉人シリーズ』だったら、例えば厚くなくても嬉しかったのに。言えないけど。

それに引き換え、枕元のプレゼントは毎年楽しみだった。

目覚めれば、いつも必ず欲しかったものが置いてあって、期待を裏切られたことがない。

まだ保育園に通ってる頃、お兄ちゃんから教えてもらったんだ。

クリスマスの一週間前になったら、仏壇のお位牌の後ろに、欲しいものを書いた紙をこっそり隠しておいてみなつて。そしたら、サンタクロースがそれを見て、眠ってる間に枕元にプレゼントを置いてつてくれるんだぜつて。

一番最初にそれを実行した年、イヴの夜はめっちゃドキドキして眠れなかった。

で、朝起きたら本当に、仮面ライダーの変身ベルトがそこに!!

飛び起きるなり、さっそくパジャマのまんま腰に巻きつけて、何度も練習したあの格好いいポーズを決めながら、「変身!」って叫んだつて。

そしたら、とたんにすげえ力が全身に漲ってきて。

絶対これ本物だ。オレはついに仮面ライダーになったのだ! なんてはしゃいだりして。本当に嬉しかったな。

オレにとつてサンタクロースという人物は、謎のベールに包まれながらも、『野口英世』や『福沢諭吉』よりも現実的で、遥かに偉人だったんだ。

だけど、四年生の時。

一週間前になったから、いつもみたいに欲しいものを紙に書き、仏壇ぶつだんに隠かくしたのは良かったんだけど。それまでは、書いてもせいぜい第三候補までだったのに、つつい調子に乗って、欲しいゲームソフト名を片かた端はしからリストアップしたのがいけなかった。

次の日の朝、顔を洗ってたら、お父さんが横よこに来て唐突とうとつにこう言った。

「聖時せいじ。それで、一番欲しいのはどれなんだ？」

「……え？」

「あれじゃあ、お父さん、どれを買ったらいいのかさっぱり分からんぞ？」

……

ピ——ツと、どこから長いホイッスルの音が聞こえた気がした。

そう。あの瞬間しゅんかん、オレの中のサンタクローズ神話しんわが、組み体操くみたいそうのピラミッドみたいに、一気に崩くずれれ落ちたのだ。

しかも、上の段のやつが膝ひざを立てたまま乗っかってきたような衝撃しょうげきが、もうすぐ夢見るティーンエイジになるうかという繊細せんさいな少年の心を、ものの見事に打ちのめしてくれた。

まったく。誕生日たんじょうびとクリスマスが一緒のイベントだということだけでも十分キズついてるってのに。

サンタクローズの正体しょうたいが、こんなにも身近なよく知ってる人物じんぶつだったなんて！

それにしても、いきなりあんなダイレクトな種明かし、酷いよ。

あれから二年経った今でも、まだダメーシが残ってる。

きつとこの先何年経っても、誕生日が来るたびに思い出すんだ。クリスマスが来るたびに、こうしてため息が出るんだ。

現実つてのは、そういうものなんだって。

オレが思い描いてたようなファンタスティックな世界は、この世にはありえない事なんだって
……

ああ、思い出したら何だか腹が立ってきたぞ。

だいたい、お父さんにはデリカシーつてもものがない。余計なこと言わなくて、いつも穏やかで好きだけど、時々言う一言がストリートすぎて逃げ場がない。

本人は何の気なしに言ってるんだらうけど。

それもこれもきつと、いつも細かい部品とにらめっこして、機械と向き合っただけだからだ。

時計の修理のことは分かってても、子供の気持ちなんて分かんないんだ。

たぶん、お母さんだったら、子供にあんなふうには言わないと思う。

そうだよ。きつとお母さんつてのは、夢を壊さないように、もっと優しく言ってくれるもんならうな……

明日から冬休みなのにちよつとテンションが下がってるのは、今、二往復目だから。不覚にも途中で上履きを忘れたことに気付いて一人、学校に引き返した。

海と山に囲まれた静かで小さな港町。なんて言うと言こえがいいけど、要するに田舎だよな、ここ。

学校は高台にあつて、途中からはほぼずっと坂道だ。

普段でもカッターライのに、終業式の日つてのは荷物が多くて。

戻りの上り坂で頑張った分、帰りの下り坂は惰性で歩いてる感じ。

眼下に広がる、国道沿いのでつかいスーパーを見下ろしながら、ひたすら坂道を下る。

空は低い雲に覆われて寒々としてるのに、余計なウォーミングアップのお陰で身体はポカポカだ。

北風に煽られながら歩道橋を駆け下りると、にわかに風向きが変わり、ほつぺたに当たる冷た

さが湿っぽさを帯びる。

潮の香り。生まれた時から町中に漂ってる、臨海のパヒューム。

って言うとは何かいい匂いみたいだけど、実はそうでもない。

それどころか、真夏の雨上がりの午後なんかは最悪だ。硫黄の温泉郷にいるみたいに、むせ返る。

マジ、変な匂いだ。慣れてるけど。

潮の香りが濃くなるのは、時間帯もあるみたい。

普通、川は海に向かって流れているけど、河口付近ってのは満潮になると海の水が逆流してくる。

さざ波が川を上って来るのって、何だか不思議な光景だ。

それから、雨が降り出す前もこんな感じだ。

微妙にんだけど、急にいつもと違う匂いが海風に乘って……

「ほら来た」

鼻の頭に一粒、ピチャリと来たかと思うと、アスファルトに黒い模様が点々と現れる。

冷たい雨。あんまり大粒じゃないから、いきなりザーツとは来ないかな。

駆け足のペースを上げると、ランドセルの中で教科書たちが、ガツタガツタ踊り始める。この川沿いの道は、道幅が広くない上に車道と歩道が分けられていない。

当然通学路じゃないけど、近道なんでもん。大人も皆、駅前に出る時はここを通ってる。

狭いのに車の通りはそれなりに多くて。雨の日だけは、もろに水をぶっ掛けられるから通らないようにしてる。

でも、まだまだ大丈夫だろう。急ごう。

カ、カーンカーンカーンカーンカーン！

「げっ」

思いがけず、けたたましい警笛に行く手を阻まれる。

同時に点滅を始めた威圧的な赤いランプが、無表情のまま『通せん棒』を振り下ろす。

ついてない。こういう時に限ってタイミング悪いんだから。

肩に掛けてた写真板を傘代わりにして、足踏みしながら待つ。

何を運んでるんだか知らないけど、長いんだよなあ貨物列車って。

目の前を色とりどりのコンテナが、ガタンガタン、ゴトンゴトン……と、急ぐ様子もなく我が物顔で通り過ぎてゆく。

もしかしたら、こうやって待ってる間の時間を少しでも紛らわそうとしてカラフルにしてるの

かな……そんなわけではないか。

やがて、軋むような金属音を残しコンテナが遠ざかると、何事も無かったかのようにゆっくりと遮断機が上がる。

ブーン！ ガタンカタン！

とたんに、いつの間にか列をなしていた車が次々と、敷かれてる鉄板を思いつきり踏みつけ怒ってるみたいな勢いで横を通り過ぎてゆく。

オレもダッシュだ。雨足が強くなつてきやがった。

荷物に振り回されながら、黒く塗りつぶされつつあるアスファルトを海岸通りまで突っ走る。防波堤の向こう、真っ白に霞んだ岸壁を横目に角を曲がれば、もうすぐそこだ。

逃げ込むようにしてアーケードに入ると、後ろで、行き交う車の流れが、ジャー……という音に変わった。

「ふう、助かった」

結構濡れちゃったけど、もう大丈夫だ。

港一番町駅前商店街。みなといちばんちょうえきまへしょうてんがい 港からお寺通りまでを結ぶ、お店屋さん通り。オレの庭みたいなもんだ。

そう言えば、「金メダリストなら十秒を切っちゃいそうなところばい、ガハハ！」って、前に船の人たちが通りすがりに笑ってた。

確かに田舎いなかの小さな商店街しょうてんがいだけど、もうちよつとあるよ長さ。たぶん。

それでムカついたからってわけじゃないけど、船の人たちってあんまり好きじゃない。声とかやたらでかいし、耳なれない言葉が怒ってるみたいで怖い感じがするんだもん。

港側から入った少し先のところに立つてるのは、ここにアーケードを架けた時に記念碑きねんひとして造られた商店街しょうてんがいのシンボル。

通りの真ん中に、つるつるの黒くてでつかい台が、でんと構えてて。そのお墓みたいな石の上には、ブロンズ製のリアルな造形ぞうけいのウミネコが羽ばたいてる。

地元の人たちが皆、この商店街しょうてんがいを『ウミネコ通り』って呼ぶのは、ここからきてるってわけ。そのシンボルも、元々が使い古しの十円玉みたいな色をしてるとは言え、すっかり潮風に晒さらされて、何だか汚れたカラスみたいに見えるのはオレだけかな。

それから、

「こんにちは」

「……」

その『サビサビガラス』の前にいつも佇たたずんではるのは、今や商店街しょうてんがいの名物になりつつある電動くるま車椅子いすのお爺じいさん。もう、お店をやめちゃって久しい森田電器の社長さんだ。

オレが物心ついた頃には既すでに、一日中こうして、ここからポーっと前の通りを眺ながめてたような気がする。

すぐく痩やせてて着てる服がブカブカに見えるけど、真っ白な髪かみと鼻の下のヒゲはいつもきれいに揃そろってて全然だらしなない感じはしない。

でも常に無表情で何を言っても反応しないから、周りからは『商店街しょうてんがいの生きた化石』とか『森田の電動式地蔵じぞう』なんて呼ばれてる。

もちろん、面と向かつては言わないけど。

「っと、今何時だろ」

そこからアーケード入り口の方を振り向くと、屋根の骨組みの下にでっかい飾かざりつきの時計がくつついてる。

大掛おおがかりなカラクリ時計らしく時間だけは合ってるみたいなんだけど、肝心かんしんのカラクリ部分ぶぶんは、もう何年も壊こわれたままになってるんだって。

実際オレ、あの扉が開いたの見たことないもんな。

「って、やばい。もう二時になるのか!」

終業式だからお昼過ぎには帰って来れる予定でいたのに。

今日は二時から、お父さんが組合の集まりで出掛ける予定になつてゐるんだつた！

再びダツシユだ。

オレんちは商店街の丁度真ん中辺りにある。目印は道の中央に設置された古い電話ボックス。そこまでなら金メダリストでなくても、ぎりぎり十秒を切れる距離だ。

見通しのいい一直線。通行客の少ないシャッター通りを全速力で駆け抜ける。

それにしても閑散としちゃつてるよな……なんて考える間もなく、左側に【竹本 時心堂時計店】の看板が見えてくる。

「ただいまっ！」

自動ドアが開ききるのを待たず半身になつて駆け込むと、店中の掛け時計が一斉に賑やかな音色を奏でた。

「遅かったな。ご飯は、裏に用意してあるから食べなさい。悪いが店番頼んだぞ」

「うん。あ、今日は「来夢」？「アルプ」？」

「ああ、来夢だよ。何かあったら電話してくれ。レジの横にスタンプ加盟店の表があるだろう。坂本さんとの欄の、上のが喫茶店の番号だ。分かるね」

「うん、分かつてる。いつてらつしやい」

「あーそれからな」

一旦行きかけて、少し猫背に丸まった大きい背広が店先で振り返る。

「今年は珍しく浩一が帰って来るそうだ。今朝、電話があつてね。何かまた連絡入ったら聞いていてくれ。夜は一緒にご飯食べような。じゃ、頼んだよ」

「あ、うん。分かった……」

お父さんは、いつものようにショーケースの上に置いてあるスタンドミラーの前で、「イーッ」みたいにして歯を剥き出すと、小声で「よし」と言つて店を出ていった。

2

「ごちそうさまでした、っと」

牛乳を飲み干し、丼サイズのお椀をお皿に重ねる。

お茶漬けとハムは全部食べたけど、漬け物は残しちゃった。だって、このナラヅケとかいうの苦手な味なんだから。

本当はピザトーストとかスパゲッティとかだったら嬉しかったんだけど、お父さんがお店を見ながら用意してくれたんだから贅沢は言えない。うちにはお母さんがいないから毎度のことだ

し。

お母さんの顔は写真で見て知ってるけど、実物を見たことがない。

オレが生まれてすぐ位に、交通事故で死んじゃったんだって。だから、当然だけど全く記憶にないんだ。

最初からいないのも同じだから、今となつてはこれが普通としか思わない。

でも、保育園でお母さんの絵を描かなきゃいけなかつた時に、「聖時くんはお父さんの絵でもいいのよ」って先生に言われたからその通り描いたら、あとで皆に「せいじくんのママには、おひげのブツブツがあるの？」なんて言われて。何かイヤだつたなあ、あの時は。

あと、参観日の時。お父さんはちゃんと見に来てくれてはいたけど、正直言うところとちよつと皆が羨ましかつた。

でも今はもう参観日なんて、こちらから固くオコトワリしてるからどつちでもいい話だけだ。

カウンターの回転イスから立ち上がり、お盆を裏に持つていく。

「裏」つてのは、お店と家の間にある小さな部屋のこと。

商店街に並んでる建物は、二階を住まいとしていたり、表側半分がお店で、そのまま残り半分が自宅になつてるといふのがほとんどだ。

うちの場合は増築したから余計、縦に細長い形してる。

お店の奥のドアを開けると、靴を脱ぐところまでの間が狭い通路になつて、その横にある古

つばい木の戸が小部屋の入り口だ。

昔はここでいつも、お爺ちゃんの時計の修理をしてたんだって。

お爺ちゃんも、オレが生まれて間もなく倒れたって聞いたから、現役だったのはもうずっとずーっと何十年も前のことだけだ。

お店を今のように改装する前は、この修理部屋もひとつながりになって、どっちかって言うと修理がメインのお店だったみたい。

でも今は、部屋ごとそっくり後ろに下げられた上に、表側の出入り口部分も壁で塞がれ、ここはもう使われていない。

お父さんの言葉で言うと、「時代が変わった」らしい。

もちろん今のお店にも、ガラスケースで囲まれた真ん中に修理をする小さな机セットがあって、お父さんはいつもそこで電池交換とかはしてる。要するに、今の時代はその位のスペースで事足りるってわけだ。

改装前のお店をオレは知らないけど、確かに、この見るからに古めかしい板張りの部屋は、白基調の壁に囲まれた明るい店内とは別世界だ。

奥にある神棚なんて、お店の雰囲気には全然合わない気がするし。

でっかい勉強机みたいなどころには、たくさん引き出しのついた小さなダンスみたいな箱や色

んな道具が所狭しと並んでいて、お店というより作業場って感じ。

だから今では、こうして一時的に物を置いたりする、言わば物置兼バックルームみたいなになる。

あとは朝と夕方、お父さんが神棚を拝むために入るくらいかな。

でもオレは、小さい時からこの部屋が結構好きだった。

木戸を開けた時の、ちよつと甘い感じに漂う機械油の匂い。

年季の入ったログハウスみたいな板壁には、まるで備え付けであるかのような同系色の古い柱時計がいくつも並ぶ。

正面の窓に映る小さな景色は、まるで異空間。

隣の靴屋さんの裏庭なんだけど、年がら年中、いろいろな色の花が咲いててお花畑みたいになつてる。

おまけに、その先向こう三軒分がトウモロコシ畑なもんだから、特に夏は、とても商店街の中心とは思えない、のどかな風景が広がる。

窓際の隅つこの方には、『ガラ箱』と呼ばれる大きな木箱が置いてあつて。

黄ばんだ新聞紙が敷かれたその中には、色んな大きさの歯車や剥き出しのゼンマイたちが、ずっしり静やかに寝転がってる。

机の引き出しをそうっと開けてみれば、細かく区分けされたマス目の中に、今度はスモールライトで手のひらサイズ、いや、指乗りサイズに縮小されたような『ミニチュア版』がコチャコチャと賑わってる。

腕時計の中身って、こんなのがギツシリ組み込まれて出来てるってんだからすごい。

いつ入ってもここは、宝物がいつぱい眠ってる秘密の部屋みたいで何だか楽しくなってくる。まさに別世界だ。

そう言えば、お兄ちゃんが家にいた頃だから、オレもまだ保育園の時かな。

かくれんぼして遊んでもらってて、ここに隠れたことがあったんだけど。

机の下に入って、上手い具合にイスを引き寄せ息を潜めてたら、妙に居心地が良くて。いつの間にか眠っちゃったことがあった。

確かその後も何回かあるな、そのまま寝ちゃったこと。そうだよ、怒られた時なんか、いじけてよくここに立てこもったりしてたもんな。

不思議と落ち着く場所でもあるんだよなあ、この部屋。

「お兄ちゃん、かあ……」

カウンターに戻る。

腰を下ろし軽く床を蹴って前を向くと、回転イスが、キィーキ……と鳴いた。

「はあ〜あ」

憂鬱だ。

年に一度のビッグイベントなのに。

オレとキリストおじさんの誕生日を明日に控えた、特別な日だったのに。

何でよりによって今日なんだよ。何で今日帰ってくるんだよ『鬼いちゃん』。

不意に頭の中で組み合わさった、おやじギャグみたいな単語が余計に脱力感を煽る。頬杖ついた顔が、やけに重い感じ。

だって、お兄ちゃんは鬼だ。鬼鬼スペシャルだ。

自分にも他人にも厳しくて、怖くて恐ろしくておっかなくて怒りんぼうで、とにかくうるさい。

人の顔を見れば、二言目には「勉強しろ」なんだから。

昔から真面目で、すごく成績優秀だったのは知ってる。

猛勉強して、一流大学に入ったのだからすごいなと思う。その点は尊敬してるよ。

だけど。だからって、オレにも同じように頑張れってのは無理な要望だ。

誰が私立中学になんか行くもんか。

友達と離れるのは絶対にいやだし、第一オレは勉強が好きじゃない。

それに……お兄ちゃんみたいに、自分のことだけ考えて、人の気持ちも分らないようなやつには絶対なりたくない——

ウィンドウの向こう側、閑静な駅前メインストリートをボーっと眺める。

それにしても静かだ。静かすぎる。だいたい『閑静』って何だよ。商店街なのに。さつきから、店の前を通り過ぎた人なんて数えるほどしかない。

何たって小学生に店番させるくらいだもんな。ありえないよな、普通。

分かっているんだ、こうなっちまった原因が何か。

オレが丁度、小学校に入学した年。隣町との境にでつかいスーパーがオープンした。

駐車場が学校の校庭くらいあって、とにかくその敷地の広さに驚いたつけ。

その日を境に商店街を歩く人の数がめつきり減ったのは、誰の目にも明らかだった。

皆がスーパーに足を向けるのは必然なのかもしれない。

家族揃って気軽に車で行けるし、一旦中に入ってしまったら、例えば品物を買わなくとも各々が自由によつたりとした時間を過ごせる。

お父さんのワイシャツも、お母さんの化粧品も、子供のオモチャも、夕飯のおかずも……とにかく何でも揃ってて便利だし。

明るくて華やかで、色んな物があつて。オレだって、あそこに行くだけで何だか楽しい気分になるもんな。

「これからは、こうでなくちゃいけない。商店街全盛の時代は終わったんだ」って言われたら、そうなのかなって思っちゃう。

だけど、それでも頑張つて何とかしようとしてる大人たちをオレは知ってる。

お父さんたちは、いつも集まつて話し合いをしてるんだ。このままじゃだめだ、どうにかしなくちゃつて。

もう全体の三分の一のお店がシャッターを下ろしてるし、後継ぎがいなくて商売をやめようとしてる『予備軍』もいる。

そう。元気な顔の人がどんどん減ってきて、本当にピンチなんだろうなということは、オレでさえ肌で感じてるつてのに。

でも、お兄ちゃんは大学を卒業したあと家に帰つて来ないどころか、よりによつてあのスーパーの本社に就職しやがつた。

賑やかだった商店街をこんなシャッター街に変えてしまった侵略軍の、しかも本拠地なんだ。

信じられなかった。見捨てられた気分だった。何よりも、お父さんがかわいそうだと思った。

口には出さないけど、きつとお父さんだつて後を継いでくれることを望んでたはずなんだ。

それなのにお兄ちゃんは、エリートになりたいからってオレたちを裏切った。
そんなやつ言うことなんか誰が聞くもんか……

天井から吹き降ろされる、乾いた温風。

暖房装置の一定した低い音の膜が、静かな店内をぼんやりと覆う。

今日は本当にクリスマススイヴなんだろうか。

ここでこうしていると、時間の流れから取り残されたみたい。

いい加減、ゲームも飽きちゃったから、セーブして電源を切ったところ。

相変わらず喧騒の『け』の字もないウィンドウの向こう側では、街頭のスピーカーから流れるリズムカルなクリスマスソングが、人気のない通りを独り淋しそうにさ迷っていた。

「ふぁあ……」

何だか眠くなってきたやつだ。

店番って退屈だ。いや、退屈だからオレにも任せられるのか。

やばい、本当に眠いや。困ったな。

どうしよう。いくら暇でも、さすがに寝るわけにはいかないんだけどな。

寝るわけ……には……

「——やれやれ、ようやく辿り着いた。随分とお待たせして悪かったね」

何だろう、温かい。日なたにいろみみたい。

あ、いらっしやいませ……あれ？

「——声だけは、しっかりと聞こえるようだね。一安心だ」

えっと、あの……

「——遅くなったが、ちゃあんと約束を果たしにきたよ。これでやっと、君の夢も叶えてあげられる」

今、お父さん居ないので、僕、よく分かんないから電話……

「——一人で店番してるのかい、偉いね。でも、私はお客さんじゃないから電話の必要はないのだよ」

はあ……

「——今はただ、知らせを持ってきただけだから。それでは今夜……」

——風。

表側からスーッと吹いてくる、冷たい風。

スピーカーから流れるクリスマスソングが、ほんの少しの間だけ大きくなって。

僅かな冷気を残して、すぐにまた遠ざかる。

随分と冷え込んできたんだな、外は……。外？

「！」

どこからか落ちるような感覚が身体をビクンと跳ねさせる。

ガタンッ！

目が覚めるのと同時に、急激な負荷をかけられ僅かに傾いた回転イスが床を強く打ち付けた。

ああ、びっくりした。授業中でなくて良かった。また皆に笑われるところだ。

今、自動ドアが開いたような気がしたんだけど、気のせいかな。

危ない危ない、居眠り中に泥棒どろぼうに入られたなんてシャレになんないぞ。

とりあえず、ゲームを再開しよう。何かやってないとマジ寝ちやいそう。

リッ テイリリリリリ テイリリリリリ…

スイッチを入れるのとほぼ同時に電話が鳴り出す。

やや遅れて鳴った目の前の子機を取ると、受話器の向こうからザワザワとノイズが聞こえた。

「はい。時心堂じしんどうでございます」

「おお、聖時せいじか。俺だよ。今、大丈夫か？」

ゲッ、オレオレ詐欺さぎよりも恐ろしい『俺』からだ。

「鬼おに…あ、お兄ちゃん？ 大丈夫だよ。ずーつと暇ひまだもん」

「父さん、いるか？」

「あ、えっと、組合の会合に行つて、まだ帰つてこないよ」

「そうか。今な、乗り換えるところなんだが、下りの連絡が悪くて予定より少し遅くなると思う。父さんには、先に始めてていいからつて伝えてくれ」

「うん。分かった」

「ところでお前、ゲームとかやりながらただボーっと店番してたわけじゃないよな？ うたた寝とか」

「そ、そんなわけ、ないじゃん……」

何で分かったんだろう。監視カメラ？ 盗聴器？ まさか透視？

そんなバカな、と思いつつも目だけで辺りをキョロキョロ見回していると、

「やっぱりな。そうやってゲームばっかやってるとな、『ゲーム脳』になって余計にバカになるぞ。いつも言ってるだろ、そういう時間を有効に活用して勉強するんだって。お前な、都会のやつらなんか塾に行つて毎日遅くまで猛勉強してるんだぞ？」

始まったよ。またその話か。

もう。早く来いよ、乗り換えの電車。

「ただでさえレベルが違うのに、ゲームなんてやってる余裕あるのか？ いいか聖時。今が一番大事な時なんだ。中学のうちに一段でもランクが上の学校に入ることが、その後の人生を楽に生きられるかどうかの鍵になるんだぞ？ 分かってるのか？」

「分かっているけど、オレ、私立には行きたくないよ。だって、皆と遊べなくなるし……それに、オレたち中学になったら一緒にサッカー部に入ろうなって男の約束してるんだ。あいつらを裏切ることは絶対にできないから」

「本当に何にも分かかってないお前は。いいか、これはお前自身の問題なんだ。誰でもない、お前自身の将来がかかった重要なことなんだ。そいつらだつてな、口ではそう言いながらも今、家で必死に受験勉強してるかもしれないぞ？ 所詮、お前たちが言う男の友情なんてそんなもんさ。親の言うことを聞いて素直に勉強したやつが最後に笑うんだよ。だいたい考えが甘いんだよ

お前は……」

所詮、って言われた後から、胸の中に何かモワツとしたものが生まれた。

それはもの凄い勢いで発熱し、沸騰したヤカンの湯気みたいに一気に頭まで上がってきた。

「とにかくな、俺の言うことは絶対に間違つてないから、しっかり勉強し……」

「うるさいよ」

「なにい？」

「お兄ちゃんになんか言われたくない」

「何だと！」

「オレは、お兄ちゃんみたいにはならないから。私立なんか絶対に行かないから！」

「お前、何だその口の利き方は！」

「うるさい！ お兄ちゃんなんか大っ嫌いだ！ もう帰つてくんなっ！」

抑えきれなくて、投げつけるように思いつき【切】ボタンを押してやった。

それに連動するかのように、店中の掛け時計が寸分の狂いもなく一斉に鳴り出す。

「何だよくそっ！ 鬼っ！」

店中を行き交う、透明感のあるハイファイサウンド。

電波時計は常に時間が正確で素晴らしいけど。

こんだけの数が、それぞれ別のメロディーを同時に鳴らすもんだからわけ分かんなくて。

「うるせえんだよ、もう！」

こういう時、お客さんがたまたま居合わせたら、「なんてメルヘンチックなのかしら」とか言うんだろな。

でも今のオレにとっては、イライラを増幅ぞうぷくさせるただの雑音ざつおんでしかない。こんなことに当たっても仕方ないんだけど、叫さけばずにはいられなかった。

「どうしたんだ、聖時せいじ」

自動ドアが開いたのも気付かず鼻息を荒くしてるところへ、お父さんが帰ってくる。

「電話、浩一からか？」

「そうだよ、『鬼おにいちゃん』からだよ！ 今から乗換えだつて。遅くなるんだつて！」
気が治おとまらない。

「何だ、また喧嘩けんかしたのか？」

「何でもない！」

「あいつはな、言い方はきついが、あれで色々とお前のことを考えてくれてるんだよ」
いつもこうだ。

お父さんは昔からお兄ちゃんの肩を持つ。

「何だよ。何でお父さんはいつも、お兄ちゃんの味方なの？」

「別にそういうつもりはないが」

「だって、いつもそうじゃないか！ オレ、何でお父さんがいつも、お兄ちゃんを悪く言わない

のか分かんないよ。オレたちを裏切ったのに！ 自分勝手な『ジコチュー野郎』なのに！」

「そういうことを言うもんじゃやない。お前の、たった一人の兄だぞ」

尚もかばいつつ、オレを嗜めるようなその冷静さが、逆に胸の中の火に油を注いだ。

「頼んで弟にしてもらったわけじゃないや！ あんな裏切り者、嫌いだ、大っ嫌いだ！」

「もういい、やめなさい」

止まらなかつた。

背を向けるように目を閉じたその顔に向かって、オレは思いつきり勢い任せにぶちまけた。

「あんなやつの弟になんか生まれてこなきやよかつた！」

……

一瞬、いやな間があつた。

疲れた顔の中で、いつもの優しい目が悲しげに据わつたかと思うと、

「！」

後悔する間もなく不自然な静けさを切り裂いたのは、引っぱたかれたほつべたの衝撃音だつた。

「そんなこと、二度と言うんじゃないぞ。お父さん許さないからな」

それは、今まで一度も見たことのない怖い顔だつた。

怒鳴りもせず、ガミガミ言うこともなく、いつも穏やかなお父さんが、怒りに声を震わせていた。

オレは居たたまれなくなつて、わざと回転イスにぶつかるとして駆け出すと、逃げ込んだ店の奥のドアを後ろ手で思いっきり閉めた。

3

ガラガラガラ　ガラガラガラガラ……

外でシャッターが閉まる音がする。

たぶん向かいの洋服屋さん、佐伯洋品店だ。

商店街のお店は、本来は午後八時が閉店時刻と決まっています、それまでは開けてなきやいけな
い。

でも向かいの佐伯洋品店は、いつも七時を過ぎると早々と閉めちゃう。

夕方から、仕事帰りの人たちで一時的に人通りが多くなる時間帯があつて、辛うじてそこまでは開けてるって感じみたい。

皆、ずるいというか規約違反なのは分かってるけど目をつぶってるんだって。よく分かんないけど。

オレが分かっていることは、今はもう七時すぎだったこと。

立てこもつてから、かれこれ二時間が経つのか。どうりで真っ暗なわけだ。

それにしても窮屈だ。泣き寝入りすらままならないとは。

この机の下は、もうオレのサイズには合わないらしい。

「よっ、いしょっつと」

やつとの思いで這い出て薄明かりの方に目をやると、窓を伝う滴が小さな綿毛に変わっていた。

「わあ、雪かあ」

冷え切ったガラス窓に手を置いて、『お花畑』を覗いてみる。

人が歩く敷石の部分はまだ雨に濡れたままで真っ黒だけど、花壇の土の上は既に薄っすらと雪化粧していた。

火照ったほっぺたを当てながら横目に見ると、ひんやりの向こう側で、遠くのトウモロコシ畑を照らす外灯が、ぼんやりと三角形の雪もやを浮かび上がらせていた。

クリスマスに雪が降るなんて何年ぶりだろう。

元々ここ沿岸の地域は雪が少ない上に、年々、地球温暖化の影響で昔より降らなくなってきたって、前にお父さんたちが話してた。

覚えてないだけかもしれないけど、この時期、こんなふう^{ふう}に積もるくらいの雪が珍しいということだけは確かだ。

そう言えば、オレが生まれた年のクリスマス——つまり生まれた日は、記録的な大雪だったって聞いたことがある。

それでさえ十二年も前の話なんだから、ホワイトクリスマスってのは本当にめつたにないことなんだろうな。

それにしても。

そんな特別な日を目前に、何でこんな気持ちにならなきゃいけないんだよ。史上最悪の誕生日になりそう^{そう}だ。

あれからお店には、何人かのお客さんが入ってきたみたいだったけど。

何れも比較的短い時間でレジを打つ音が聞こえてきたから、きつと電池交換とかバンド交換のお客さんだったんだろう。

「参ったなあ」

お父さん、まだ怒ってるかな。

出て行くタイミングがつかめない。

こんな状態でお兄ちゃんが帰ってきたら、ますます最悪だ。

って言うか、あんなこと言っちゃった後で、どんな顔して会えばいいのか。

よりよって今日、二人を敵に回すハメになるとは、なんてオレはバカなんだろう。

これじゃ、プレゼントも諦めざるを得ない状況だ。

「あゝああ、本当に最悪だ」

外の景色とは対照的なブルークリスマスを頭の中に描き、ため息をつきながら古びた写真立てに手を伸ばす。

作業機の端っこに置かれてる、それ。くすんだ木枠の中に収められた、色褪せてトーンの甘くなつたカラー写真。

暗闇に慣れきつた目が、窓際の僅かな雪明りの中でその色を捉える。

「これって、オレが生まれる何年も前の写真なんだよなあ」

脇の方に『どんな時計でも修理します』と書かれたノボリが立ってて、見るからに昔っぽいお店の前に笑顔が四つ並んでる。

お父さんの昔話だと、うちのお爺ちゃんってすごく厳しい人だったみたいだけど。どう見ても優しい人っぽいんだけどなあ。

お兄ちゃんも、こんな幼い時期があったんだな。ウルトラマンの帽子か、これ。無邪気に『な
んとか光線』みたいなポーズまで作っちゃって。

お父さんも若いな。今より背が高く見える。姿勢がいいからかな。

そして、その隣で優しそうに微笑む、色白の若い女性……

「お母さん……」

オレに一番近い人のはずなのに、全然知らない人。

「ねえ、何で」

声も、ぬくもりも、優しさも、何もかも分かんない。覚えてない。

学校の先生よりも、テレビのアイドルの人たちよりも、遠い遠い存在の人——

「ねえ。何で、何で死んじゃったの？」

いつもは別に寂しくも何ともない。強がりとかじゃなくて、本当に。

だけど。

こういう時、無性に会いたくなる。たまらなく恋しくなる。

どんな人なのかも分かんなくせに、すごく凄く甘えなくなる。

きつと、この人だけは、どんな時もオレの味方でいてくれそうな気がするから。

例え世界中の皆がオレを見放しても、この人だけはいつもオレを包んでいてくれる気がするから。この、誰よりも優しい笑顔で……

「ねえ、お母さん」

お兄ちゃんはいいよな。

お爺ちゃんのこと、お母さんのことも知ってる。

一緒に楽しい時間を過ごして、いっぱい可愛がってもらったんだろうな。

別にひがんでるわけじゃないんだ。自分のことを不幸だなんて思ったこともない。

ただ……この写真を見るたびに、いつも思うんだ。

オレも、この中に入れたらいいのになって。

この写真の中で、皆と一緒に笑っていたかかったなって。

ほんの一瞬でもいいから、こうやってお母さんとの思い出が残せるような時間を、過ごせたらよかったのになって……

——ゴト、チャリリン……

不意に、何かが床に落ちるような音がした。

「ん？」

作業機のスタンドを灯し、辺りを見回したが何も落ちてない。

「おかしいなあ。確かに今、この辺で音がしたはずなのに」
首を傾げながら腰をかがめ、注意深く目を凝らす。

「あ、あれか？ 何だあれ」

作業機の下。

影になった奥の真つ暗いところに、僅かに青白い光りを帯びた何かが、ぼんやりと浮かび上がっている。

腕をめいっばい伸ばし拾い上げてみると、それは鉄の鍵のようなものだった。

「あれ？ 光つてないじゃん。どうなってるんだ？」

実際に手に取ったそれは、光るどころか見るからに年代ものの風格を醸し出す、黒ずんだ錆び色をしていた。

しかも、鍵のようだが先つちよにそれらしいギザギザはなく、中が四角い空洞になっている。まるで途中から切り落としたみたい。

上の飾り部分には、よくマンガとかで泥棒が背負ってる風呂敷の柄（唐草模様とか言うやつ？）を、もっと複雑にしたような透かし模様が施してあった。

何だかゲームに出てくる伝説の鍵みたいで、不思議な格好よさがあった。

「待てよ。これってもしかして……」

思いついて窓際の『ガラ箱』を漁る。

「あった。やっぱりそうか」

中が四角い空洞になった鍵には見覚えがあった。

小さい頃に、この『ガラ箱』から持ち出して「これ、なあに？」って聞いたら、お父さんが「昔の時計のゼンマイを巻く鍵だよ」って教えてくれたつけ。

でも、こんな複雑な模様つきのを見るのは初めてだ。

何か得した気分。

「どれに合うのかな、この鍵」

壁に掛かっている時計のガラス蓋を片つ端から開け、文字盤の穴に当ててみる。

これでゼンマイを巻いたら動き出すんだよな。何だか急に楽しくなってきたぞ。

穴はどの時計にも二つずつあって、どっちがどうかはさっぱり分かんないから、とにかく手当たり次第。

しかし――

「これもだめかあ。どの時計の鍵なんだろう」

しらみつぶしにやってみたが、穴の直径が大きすぎたり小さすぎたりで全く合わなかった。

「残るは、あれだけか。んーイマイチだなあ」

反対側の壁。作業機の脇の方に一つだけ別に掛けられた一番古臭いやつ。

文字盤なんか、最初は白かったんだろうけど、すっかり日に焼けて汚れたみたいに黄色っぽくグラデーションしちゃって。

その黄ばんだ文字盤の中心から少し上の位置には、周りのローマ数字と同じ黒いインクで、他の時計よりも大き目に『8 DAY』と書かれてる。

聞いた話だと、これはお爺ちゃんが若い頃（『デッチボーコー』だった時？）、練習用にと苦労して自前で買った外国製の時計らしい。

『8 DAY』ってのは『八日巻き』と言って、一週間に一度ゼンマイを巻きながら使う、当時もとても一般的だった時計みたい。

機械時計の基本中の基本なんだって。

お父さんも昔、これで分解とか組み立てを教わったって言ってた。

その他大多数の時計と同じ八角形の頭をしてるけど、木の艶とか丸みとかが他のとはちよつと違う雰囲気（ふんいき）で高級感が漂（た）ってる。

確かに見た目はすごく味があつて悪くない。

だけど、ガラス蓋（ふた）や振り子すらついてなくて、これじゃまるでスクラップの一步手前みたいだ。

例えゼンマイを巻くことができたとしても動きそうにないんだよな、これ。

「ま、いつか」

オレは半ば諦（あきら）めながら、最後に『だめもと』でその古時計の穴に鍵（かぎ）を差し込んでみた。

すると、

カチャン…

「おお!? やったあ!」

思いがけず、穴に鍵が収まったもんだから嬉しくなっちゃって。

さっそくゼンマイを巻いてみようかと指に力を込めたのだが、次の瞬間、鍵が突然またボーっと浮かび上がるように青白く光り出した。

「な、何だよ。この鍵」

咄嗟に手を離し戸惑ってるオレの視界に、今度は別の異変が飛び込んでくる。

見ると、まるでその鍵からパワーでも与えられたみたいに、文字盤上部の文字までもが青白い光を帯び始めていた。

やがて文字は瞬間的に眩い光りを放ったが、別にそれ以上どうなるわけでもなく、何事もなかったかのように元のままの状態に戻っ——

「え!？」

それは、ごく小さな変化だった。

だけど、オレを混乱へと導くには十分すぎるほどの劇的な変化だった。

「し、信じられねえ、こんなの」

目を疑った。

文字盤上の『八日巻き』を示す、その文字。

光りが治まれば何の変哲もない、何十年も前に書かれたであろう、掠れた、黒い、インク文字。

その、ただ周りの黄ばみに同化するように薄れていた『8DAY』の『8』の部分が、九十度向きを変えていた。

そう。まるで、『無限大』を示すマークのように――

「無限大…デイ…?」

— ∞ —

ガチャリ！ ガチャリガチャリガチャリ！

突然、身体中が青白く光り出したかと思うと、後ろで自転車のギアチェンジに似た音が畳み掛けるように連なつた。

「――さあ、行こう。準備はできたよ」

何か切り替わるようなその金属音に紛れて、誰か人の声が聞こえた気がした。

振り返ると、もう何年もの間、沈黙を守り続けてきた掛け時計たちが、永い眠りから目覚め大きく伸びをするように、ギ、ギギギ、ギイギギギ……とゆっくり長針を動かして始めている。

しかもだ。どの時計も揃って反時計回りしながら、どんどん加速していくではないか。

「ど、どうなってるんだ!？」

やがて、捲くし立てるような時計の多重奏とハト時計の輪唱とが、運動会の応援合戦みたいな勢いで部屋中に鳴り響く。

スピーカーを必要とせず、縦横無尽に空間を駆け巡るアナログ生音のど迫力に、たまらずオレは耳をふさいだ。

その時だった。

「うわあっ!」

いきなり、最上階から急降下する高速エレベーターに乗つけられたような感覚が全身を襲ってきた。

と思つたら、遊園地のコーヒークップでふざけてハンドルを回しまくった時みたいに、部屋の景色がぐるぐると回り始めた。

いや、そんなもんじゃない。部屋全体がよじれながら色んな方向に傾いて、目の前が天井になつたり床になつたりした。

もう、立っていられなかった。

オレは、倒れるようにその場にしゃがみ込むと、耳をふさいでも尚^{なお}追いかけてくる『時の輪舞』^{ロンド}から逃^{のが}れるように、グッと固く目を閉じた。

4

耳鳴り。

めまい。

「――少しの辛抱^{しんぼう}だよ。すぐに楽になる」

何だよ、幻聴^{げんちょう}まで聞こえてくる。

頭がおかしくなりそうだ。いや、既^{すで}におかしくなっちゃったのかな。

助けて、お父さん。お兄ちゃんでもいい。

頼むよ。こんなの耐えられないよ。

お願い、誰か、誰か助けて——

残念ながらオレ、たぶん宇宙飛行士にはなれない。

別に将来の夢だったとか、そういうんじゃないけど。

前にテレビで見たことがあった。

宇宙飛行士を養成する訓練で、はりつけの刑みたいにされたまま、ぐるんぐるん全方向に回されるアレ。

機会があつたら一回くらいやってみたいな、なんて軽く思ってたけど。ちよつと無理かも。

三半規管さんはんきかんつて耳の奥の方にあるんだよな、確か。

だとすれば、音のうるささとバランスつて関係あるのかな。あるはずだよ、絶対。

こんなふうに平衡感覚へいこうかんかくをダイレクトに攻められても平気な人じゃないと、宇宙には行けないってわけだ。

でも。こんなに辛いつらい思いをして鍛えまえなくても、誰もが快適に宇宙旅行できる、もっと性能がいいロケットとか作られればいいのにな。

とりあえず、冷静にこんなことを考えられるようになったのは、『養成訓練』がどうやら治ま
ったみたいだから。

何だったんだろう、今の。マジ死ぬかと思っただよ。

ほんの一瞬の出来事のように、もの凄く長い時間のようにも感じられた。

自分から志願してこんな目に遭うのは、やっぱり御免だ。

それにしても、昔の時計の音って凄まじい。もう、勘弁してくれって感じ。

考えてみりゃ、狭い部屋で色んな打楽器を生演奏してるようなもんだから、うるさくて当然
か。

って言うか、まだ鳴ってやがる。

うるさいなあ。

こんなふうには耳をふさいでも、箱の中で聞いているみたいにくわんぐわん反響してるんだもん
……って。

「あれ？」

目を開けると、やたらと窮屈な暗闇にいた。

いや、正確に言えばオレ自身は暗闇の中にいるけど、目の前にあるたぐさんの隙間からは外の
様子が見え隠れしていて、密閉されてるわけじゃない。

しかもその向こう側にある眺めは、角度的にどうやら馴染み深いところから見てる景色のよう
で。

ついでに、この窮屈合もよく知ってるぞ。

「おかしいなあ。どうなってんだ」

首を傾げるだけで頭をぶつけそうな場所。

いつの間にもまた机の下に入ったんだろう。無意識に隠れたのかな。学校でやった地震訓練の成
果か？

気が付くと、時計もようやく鳴り終わってくれたみたいだった。

ホッとして耳から手を離すと、さっきまでの騒々しさが嘘みたいな静寂の中で、カッチとコッ
チとが追いかけてくるように時を刻んでいた。

でも、そう言えば何でいきなり時計が動き始めてるんだろう。そうだよ、何で鳴ったりしてた
んだ？

そもそも、咄嗟にここに隠れなきゃいけないような理由が何かあったんだろうか。やっぱり地
震？

違うな、こうしてずっと机の下に入ってたような気もするし。

おかしいな、思い出せなくなったぞ。

ついさっきまで分かってたような気がしてたのに、全然何にも覚えてない。

それに部屋の様子が、さっきまでとは比べものにならないくらいに明るいのは何で？
まさか、皆怒ってるから起こしてくれなくて、ここで一晩明かしちゃったとか……

「痛っ」

不意に目の前の隙間が動いたかと思ったら、体育座り状態で縮こまつてる足が何かに踏みつけられ、

ガンッ！

その反動で、机の脚の補強材に横ヘッドバッドを打ち込んだ。

「痛ってえな、もう……」

ダブルの衝撃。

ベニヤ板だから音のわりには大して痛くなかったけど。

足の方はかなり深刻だ。スニーカーごしとは言え、親指の爪部分をグリツとやられたもんだから、もうマジ泣きそう。

爪先をさすりながら蹲っていると、キュルキュルキュルというキヤスターの転がっていく音がした。

「ん？」

ふと顔を上げるや否や、オレは、

「うわっ！」

ガガンッ！

今度は引き出しの裏下にロケットのようなヘッドバッドを打ち上げた。

今のは相当痛かった。だけど、それどころじゃない。

だって、そこには、

「あ、ああ……」

目の前にぬうっと現れたのは、片目に黒いものをはめ込んだままこちらを睨みつける、海賊の親分みたいな怖い顔。

でも、その表情にビビッてるわけじゃない。

これは分かっているんだ。

お父さんも同じで、修理中に話しかけたりすると、別に怒らせたわけでもないのに振り向いた顔が睨んでる。

細かい作業をしている時、いちいち外すのが面倒なんだって。小さい時は怒られたんじゃないかって怯んだりしてたけど、そうじゃないってのはもう分かっている。前から分かっているんだ。

でも、こ、この人って、

「お、おお、お……」

イスに座ったまま前屈みになって、こちらを覗き込むようにしている見覚えのある姿。

キズミをつけたまま、訝しげにこちらを見つめる白いヒゲ。

「おお、おじ、おじ……??」

そう。そこには、明らかにあの色褪せた写真の中で見た、お爺ちゃんの顔があった――

「誰だね？」

「しゃ、喋った！」

「そんなところで何をしとる」

「少し掠れたような乾いた声。足もあるぞ、普通に。」

「幽霊じゃないの？」

「あの、オレ、あ、いや僕、その……」

「まあ、まずはそこから出たらどうだね？」

「慌てつつも、そこかしこぶつけないように慎重に身体を起こす。」

「ほほう。よくもまあ、こんな大きななりをして、こんな狭いところに隠れておったもんだな」

「尚も海賊顔で、不自然に固まってるオレを足先から頭の上まで品定めするように見てる。」

「被ってる毛糸っぽいチョコレート色の帽子は、てっぺんに丸いのがついてて、何だか海賊の親分というにはかわいらしいんだけど。」

「んん？」

「やがて視線が顔を捉えると、お爺ちゃんはおもむろにキズミを外し、まじまじとオレを見始めた。」

「はて」

顔に穴が開いていく気がした。

そんなに見られると、目のやり場に困っちゃうよ。

それより、オレの今置かれてる状況つてのがあまりにも不可解で、尚更目が泳いじやう。

見慣れてるはずの部屋。配置も何もかもがいつも通りなんだけど、何かが違う。

そこにあるもの全てが、決して新しくなったわけじゃないのに、何となく活き活きとしてるよ
うな感じ。

それに窓の外はどう見てもまだ夜じゃないし。どうなってんだ。

極めつけは、目の前にいる、この世にいるはずのない人。

明らかに現実でないことだけは確かだ。

そうか、待てよ。意識はハッキリとしてるけど、実はオレ眠ってるのかもしれない。それなら
納得がいく。

だいたい、さつきから妙に記憶がおぼろげで感覚が現実的じゃないもんな。どう考えたってお
かしい。

まるで……

「夢を見ているようだな」

胸の中にあっただ言葉の続きが、白い口ヒゲの動きと重なる。

「えっ？」

お爺ちゃんおじいちゃんは腕組みうでかみをして背もたれに寄り掛かると、今度は目を細めて、

「不思議ふしぎなこともあるもんだ」

そう呟つぶやいた。

「たっだいまあー！」

そこへ、やけに元気な声が表のドアを勢いよく開け、ガツタガツタと聞き覚えのある音を弾はずませながら木戸の向こう側を走り抜けていく。

同時に頭の中を、何だか面倒めんどうなことになりそうな予感も走り抜けた。

って言うかさ、いいかげん早く覚さめてくれよ、夢。

「お、帰ってきたな、わんぱく坊主」

ようやくお爺おじいちゃんの視線から解放されたかと思つたら、家の中から聞こえてきた小さな会話で再び胸の糸が張り詰つめた。

「ちよつと、コウちゃん？ またランドセルをこんなところに放り投げて。何度言つたら分かるの？」

「ごめん母さん、俺、急いでるんだ！ 行つてきまーす！」

「宿題もやらずにどこに行くの。ちよつと、コウちゃん！」

「ちゃんと約束どおり真っ直ぐ帰ってきたじゃん。あとでやるからあ！ 今、急いでるんだつてばあー！」

「だーめ！ 待ちなさい！ 寄り道しなきゃいいってもんじやないでしょ？」

やがて、ドタバタと慌あわてたような靴音くつおとが、「もー！」とか叫さけびながら木戸を開け中に入ってくる。

学校指定、伝統のマリンブルーに二本の白線。そのジャージ姿に重なる、メガネを外した時の

『彼』の面影おもかげ――

目を擦こすってみる。やつぱりだめか。参ったな。

どう見てもお兄ちゃんだよな、この子。

「お願いジージ、助けて？ もう試合始まつてるんだ。それに、ただでさえ強豪きやうかうなのに向こうは今日一人多いんだよ。『ひっこ』が都合悪い上に俺が行かなきゃ絶対にボロ負けしちゃうんだ、このとおり！」

顔の前で合わせた手の下から、ギュツと閉じた目を片方だけ開けて恐る恐るこちらを窺うかがつてる。

『ジージ』だつてさ。『コウちゃん』とか呼ばれてるし。あの顔のまんまだけど何だか妙みょうに子供っぽいなあ。あ、子供か今は。

「……あれ？」

うわ、目が合った。

「お前、誰なの？」

弟デス。

そうとしか言いようがないけど、言えるわけがない。

でも、あれか。夢ならどう言おうが関係ないよな。どうせ目が覚めれば何の不都合もないし。

いつそのこと、「ボク桃太郎です、未来からお兄退治にきました！」とでも言ってみるか。わけ分かんなくていいかも。

なんて、この場に及んで密かに日頃の仕返しを思いついちゃう自分が、ちよつとネクラみたいで嫌気が差した。

そんな自己嫌悪に浸る間もなく、玄関で「よいしょ」と小さな掛け声が出て、足音がゆつくりとこちらに近づいてくる。

やがて足音は、開け放たれた部屋の前に立った。

「コウちゃん、待ちなさ……あら、お友達も来てたの？」

瞬間。心臓を直接鷲つかみで圧縮されたかのように、胸がドクン！と大きく脈打った。

「こんにちは。同じクラスかな？　うちに来るのは初めてよね？」

喋ってる。お母さんが、生きて、目の前で笑ってる……

「いつも浩一と遊んでくれて、ありがとねー」

見開いた目が、その姿を捉えたまま離れようとしなかった。
瞬きを忘れるほどに、見つめられずにはいられなかった。

もしかして、一目惚れってこんな感じなのかな。

出会った瞬間に好きになるって、こういうことを言うのかな。

自分の親なのに、こんな気持ちになるなんて、オレおかしいのかな。

だって、写真よりずっときれいで、かわいくって、優しそうだよ。

セーターが膝ぐらいまであって、お腹の辺りがぼっこり丸く膨らんでるけど、太ってるからじゃないよね。分かってる。

でも別に太ってたって何だっていいんだ。

だってこれが、この人がオレの、お母さん……

「ああ、この子はな、わしの古い友人の孫だよ。わけあって二、三日預かることになった。構わんかね？」

「あら、そうだったんですか。ええ、私は一向に構わないですよ。同い年くらいかしら？ この子は浩一って言うの、仲良くしてね？」

ぎこちなく頷くのが精一杯だった。

先生に五時間目のまどろみを打ち破られ、「次、読んでみる」と言われた時よりも心臓がバクバクいつてる。

それにしても、ことがうまく運び過ぎてるのは、やっぱりこれが夢だからだろうか。

でも。もしも、もしもそうなら――

「ぼ、僕、聖時、つて言います……」

「聖時くんね。遠慮しなくていいのよ？ ゆっくりしてつてね？」

「は、はい！」

お願い。もしもそうなら、やつぱりまだ覚めないで。

夢なら、夢なら覚めないでいて……

「お前、サッカーできる？」

不意にマリンプルーのジャージが横に来て、小声で言った。

「え、ああ、まあまあ」

そんな事どうでもよくて適当に返事したら、何だか目をキラキラさせて、

「本当か？ 攻め？ 守り？」

つて、しつこいから

「うん。一応、フワード」

つて答えたら、囁き声で「イエス！ イエス！」つて叫びながら小さくガッツポーズ作つてや

がる。

この子、本当にあの『鬼いちゃん』か？ 何か秀囲気がまるで別人みたいだよな。

人間って大人になるにつれて、あんなにも変わっちゃうもんなんだろうか。
なんて思ってたなら、

「決まり！ 行くぞ、セージ！」

「おあっ！」

出し抜けに何なんだ、こいつは。

どうやら『ジコチュー野郎』なのは変わってないらしい。

おいおい、袖そでだけ引つ張んなよ、脱ぬげちゃうつて！

「コウちゃん！ ちよつと、コウ！ こらつ、待ちなさい浩一！」

「ちゃんと五時には帰るから！ 行つてきまーす！」

「おい、ちよつ、やめ、放せ！ 放せー！」

振りほどこうにも伸びた袖そでをグイグイ持つてかれたら、なす術すゑもない。これじゃまるで犬の散歩状態だ。

もつとお母さんと一緒にいたかったのに！

オレは、ただただこの夢がずーつと覚さめませんようにと祈いのりながら、少年コウちゃんに引きずられるようにして泣く泣く部屋をあとにした。

第二章

妙みょう
な
尊うん

ドアを開けると、お客さんが何人かショーケースを眺めていた。

いつもより、どことなく明るさが白っぽく感じるお店の真ん中で、お父さんが背中を丸めて机に向かっている。

オレたちがドタバタと横を通り過ぎると、海賊の睨みで一度チラッとこちらを見て、いつもみたいに小さく手を振ってくれたけど。

もう一度顔を上げると、ちよつと不思議そうに首を傾げてた。

さつきまであんなに気まずかったのに、お父さんだけは一番身近な感じがして、何かホツとしちゃった。

だって信じられない状況の中で、唯一変わってない存在なんだもん。でも、髪の毛は随分と真つ黒だなあ。

そんなことを思いつつ何の気なしに表に目を向けたら、また目を擦りたくなかった。

「これって——」

おどろ
驚く間もなく連れ出された自動ドアの向こう側。

そこには理想郷という名の、まさに夢の世界が広がっていた。

店看板かんばんの下から斜めに突き出した、『SALE』と書かれた三角の旗はたたち。

その鮮あざやかな赤と緑とが交互に、商店街の端から端までズラッと両サイドに連なってる。

向かいの洋服屋さんも、その隣のお菓子屋さんも薬屋さんも皆、店先を小さなツリーやリーフで賑やかに飾りつけてる。

そんなクリスマス色いろに華はなやいだ通りを行き交う、様々な色を纏まとった人たち。

流れゆくショーウィンドウはどれも、チカチカ煌めいては人ごみに紛れ、また現れては煌めき、まるで街頭のクリスマスソングに合わせるかのように楽しげなりズムで瞬またたいてる。

見上げれば、でっかく【港一番町駅前商店街★大クリスマスセール】と書かれた横断幕おくだんまくが、雑踏ざつたつと天井てんじょうの間に華はな々しく歓迎かんげいのアーチを架かけていた。

そう言えば小さい頃は、季節が変わるたび、こういうのが何種類か順繰りに架かかってたような気がするな……

その、頭のどこかで思い描いていたメインストリート本来の姿は、オレみたいな子供こどもでさえ妙な懐なつかしさを覚えるほどに、遠い昔話の世界に思えた。

連れて来られたのは、歩道橋の先にある川沿いの土手だった。

途中、いい加減走りづらくて「もう放せよ、どこ行くんだよー」って文句言ったら、「Kリーグが開幕したんだ！」なんてわけ分かんないことを言うから聞き返したんだ。そしたら「河川敷のK！」だって。なんのこっちゃ。

オレがズッコケる素振りをしたらそれが妙にウケて、気に入られちゃったみたいで。そこからは並んで走りながら色々教えてくれた。

ついこの前までは仲間四人、港の近くにある『ウミネコ公園』で野球ごっこをしてたらしい。ところが学校に苦情がいつて（どうやら身に覚えがあるみたい）こっぴどく怒られたんだって。

いい遊び場がないか探したら、ここを見つけたが既に先客がいた。昔から川を境に学区が分けられてるんだけど、そいつらはいつもここでサッカーをやってる隣の小学校の連中だった。

サッカーが流行ってきたて（Jリーグがまだ始まったばかり!?）興味もあつたが、最初は端っこの方で小さく野球ごっこをした。

そのうち向こうの方から「一緒にやろうぜ」って誘ってくれたのがキツカケで、まぜてもらふことになった。

話してみると、すぐく気が合いそうな連中だったって。勉強なんかより友達との時間を重んじるスタンスが、『ムテキーズ』の信念に通じるものがあつたとか何とか、さっぱり意味分かんなかったけど。

まあ、そんなこんなで、やってみたら最後、「サッカーって、すげえ燃えるよな！」ってことで、ついにはクラスの中に声を掛けて人数を集め、対校試合できるまでに発展したんだってなるほど『Kリーグ』ね。

こんなわけ分かんない状況にもかかわらず、話を聞きながら妙にワクワクしてる自分がいた。それまで戸惑いながらふてくされてたのに、「そうなんだよ。サッカーって燃えるんだよね」なんて急に相槌打ってみたりして。

相手がああ『鬼いちゃん』の前身だとは言え、サッカーのこととなれば話は別だ。だって、大好きなんだもん。

土手に上がると、今はゲートボール場になってしまった場所の辺りに、ネットのないサビサビのゴールが見えてきた。

ほとんど消えかかった白線の囲いの中では既に、マリンブルーとエンジとが入り交じり、騒ぎながらボールを追いかけ走り回ってる。

一見いい色だけど微妙に田舎っぼさを含んだこのブルーは、オレも通ってる港第一小学校（通称『みな小』）のジャージ。

で、何となく昔から威圧感があつて、見かけるとついつい意識してしまうこのエンジは、南港台小学校（通称『なん小』）のジャージ。

立ち読みサンプル はここまで

普段こんな光景を目にすることは、めったにない。学区は隣同士^{となりどうし}だけど、オレの周りに限って言えばほとんど交流なんかないし。

ましてや市内の大会でも何でもないのに、皆こぞってジャージ姿だなんて。

この寒空の下で、枠内^{むか}に収まり^{おさ}競り合^あつてる赤と青のコントラストが、何だかすごく新鮮だった。

「おーい！」

こちらに気付いた一人が、大きく手を振りながら「タイム！ タイム！」と叫^{さけ}んで駆^かけ寄^かってくる。

オレたちも土手を駆^かけ下^{くだ}りていくと、もう一人別のやつもゴール前から白い息を弾^{はず}ませ、こちらに向^{むか}かって走^{はし}ってきた。

「もう、コウちゃん遅^{おそ}いって！」

先に到着^{とちやく}した、小柄^{こがら}で見るからにすばしっこそうな茶髪^{ちやまげ}くんが、ジャージのズボンを捲^まり上げながら擻^{しか}めつ面^{おもて}で涙^{なみだ}を啜^{すす}る。

「洋平、悪い！ ちょっと家で手こず^てつちまつた。今、何対何？」

「二―一で負^まけてる。ついさつき、またまた『坂^{さか}ピー』がカミワザで何とか一点返^{かえ}したとこ」

「おお？ またまた!? すげえ！」